

## インビトウィーン (in-between) の時間と空間

—  
神原充大

(建築家/リサーチャー)

京都国立近代美術館の南にあるコンビニ前の駐車場に、いつの頃からか赤い毛氈のような布が敷かれた腰掛けと傘が置かれるようになり、観光客と思しき多くの人々がそこでくつろいでいる。この界限では常に人は移動している、という印象があったので驚いている。

岡崎は平日よりも休日に人が多く、日中に比べて夜間には人気がなくなり、そして常に座るところがあまりない、と感じていた。しかしロームシアター京都に入ったスターボックスの存在でその印象も少し変わり、「常に一定の人がそこに滞在している」という感覚を持つようになった。京都美術館時代にはなかった風景だ、と思う。

ところで、「京都美術館」から「ロームシアター京都」へ至るまでの道のりは、必ずしも平坦ではなかったことを覚えておられる方も多いと思う。当時どんな議論があったのかを伝える「I Love Kyoto Kaikan」というブログが今も残っている。平成23年3月策定の「岡崎地域活性化ビジョン」の存在はこの媒体に教えてもらった。

その際に行われたアンケートを見ると、岡崎への主たる来訪目的は「美術鑑賞」が25%と最も多かった。また、欲しい施設・サービスとして「団らんや休息などができる休憩所・交流スペース(カフェ、ベンチ等)」が48%、「飲食施設・サービス(レストラン等)」が40%、そして「水や緑などの自然が感じられる園地・公園スペース(芝生ひろば、オープンスペース等)」が36%となっている。当時は存在していなかったスターボックスはこの上位3つをおおむねかなえた。空間をより多くの人たちに開こうと意識した民間企業の参入でまちの風景は変わる。冒頭のコンビニも然りだろう。アンケートから6年経った現在、この地への来訪目的も変わっているかもしれない。

ただ、ある地域にとって重要なのは、展覧会を観る、とか、ご飯を食べる、とか、ピクニックをする、とか、そういう目的だけではなく、目的と目的の間、その移動の途中などの「インビトウィーン」の時間もまた同様に大切だと思うのだ。

それは時間のみならず、空間的な意味での「インビトウィーン」もある。例えば春に南禅寺舟溜り乗船場から夷川ダムまでの琵琶湖疏水を舟から楽しむ十石舟めぐりがあるが、疎水は「中から見るか外から見るか」だけではない。疎水とその周囲がゆるやかにつながっていた方が人の滞留の可能性はあがる。近代美術館とその裏のみやこめっせの疎水沿いが親水空間になっていると、ある目的のために訪れた人がその「合間」を過ごすための空間が生まれる。

改修工事を控えている京都市美術館の裏側には池と藤棚があり、その下のベンチは知る人ぞ知る「インビトウィーン」のための休憩所となっている。休日でも周囲の喧騒(隣は動物園)から独立している。改修後の「表側」は今よりも地面が掘られて傾斜のついたスロープ広場になる予定。ちょうど真正面にあたる近代美術館のエントランス前広場と一体的に変える……というのは難しいかもしれないが、呼応したような空間の使い方ができると「インビトウィーン」の時間が過ごしやすくなるだろう。パスを待ったり、展示の感想を話し合ったり、何気なくたたずんだりという具合に。

いま私がシティプロモーションに携わっている愛知県の岡崎市は、京都の岡崎に比べて圧倒的に街中に人がおらず、まずはそこに「目的地」をいかにつくることができるかが問われている。対して京都の岡崎では目的地となる場所は多くある。ゆえに「インビトウィーン」の時間と空間をどれだけよりよいものにできるかが、この地の課題なのではないかと考えている。